

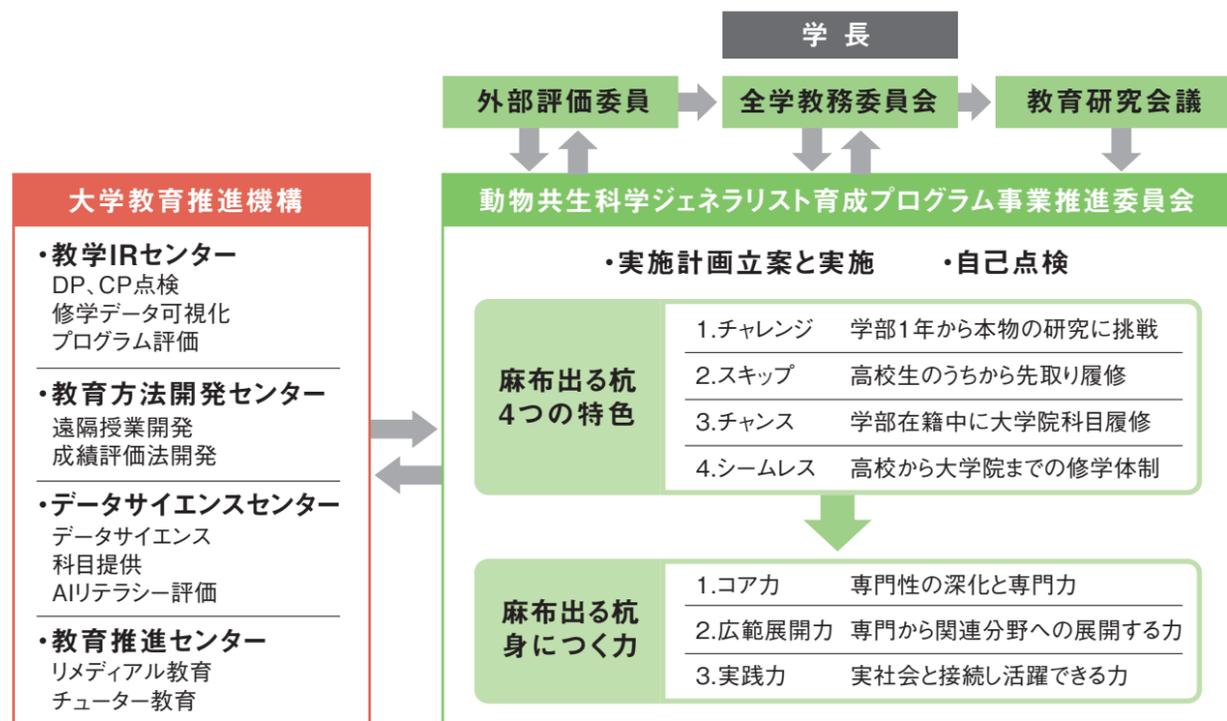


キャンパス / 神奈川県相模原市 学生数 / 2,459人 創立 / 1890年 建学の精神 / 学理の討究と誠実なる実践
 学部 / 獣医、生命・環境科学
 大学院 / 獣医学、環境保健学
 THE 日本大学ランキング2023 / 201+位

「地球共生系One Health」を軸に、新しい時代に向けた5つの改革を展開

- ① データサイエンス教育の推進
- ② 麻布大学の特色を活かした教育の推進
- ③ 初年次教育・キャリア教育の充実
- ④ ゆとりを持った学修日程の設定
- ⑤ 市民に開かれた教育の推進

動物共生科学ジェネラリスト育成プログラム(麻布出る杭) 推進体制



注目 「科学基礎力」「行動特性」の両面で学修成果を可視化し学生の成長を促す

「麻布出る杭」が、文科省の中間評価で「S」を受けた要因の一つは、学修成果の可視化の実装にある。全学展開にあたって大学教育推進機構を新たに立ち上げ、教学IRセンター、教育方法開発センター、データサイエンスセンター、教育推進センターを設置。教学IRセンターは全学生のデータを把握し、学修成果の可視化と個別修学を支援する。学修成果の可視化は、大学独自の「サイエンスリテラシーテスト」「コンピテンシーテスト」を活用。学生はこれらを年に1度受検し、力の伸長を把握する。テストを開発した獣医学部菊水健史教授は、「大事なのは自己理解。力の伸びを実感できれば自信につながるし、研究をするうえで足りない力も見えてくる」と話す。両テスト結果から導き出された学生の特性は9タイプの動物(イヌ、ライオン、キツネなど)で表現し、返却シートにスコアと共に記載。教員からのメッセージも加えて、次の成長を促す。同大学では現在、「麻布出る杭」を経験した学生が社会に出て、どう活躍できているのかを測るしくみを構築中だ。

独自の評価テストで測る項目

サイエンスリテラシーテスト	専門性の土壌となる科学基礎力を測定 正しい科学的知見を得るための情報精査の方法を知っている ・批判的思考力 ・情報精査力 ・研究倫理の理解 ・研究デザイン知識 データ・科学的情報の整理、分析、解釈ができる ・グラフ作成力 ・グラフ読解力 ・数量的スキル ・統計的スキル ・課題発見力
	行動特性を主観的に評価 コミュニケーション力 創造力 ・外向性 ・記述力・読解力 ・発想力 問題解決力 自己実現力 ・計画実行力 ・自己統制力 ・ストレス耐性 ・論理的思考力 ・目標設定 ・達成思考 組織行動力 ・主体性 ・状況把握力 ・リーダーシップ

*緑文字で示した力を可視化するために、黒文字の項目を測定

研究意欲を高校から大学院までつなぐ教育で“出る杭”を伸ばす

CASE STUDY

麻布大学

文科省の「出る杭」プログラム*に唯一採択され、中間評価で「S」を受けた「麻布出る杭」。同プログラムの内容と展開の経緯について、大学教育推進機構長に話を聞く。



理事・大学教育推進機構長

村上 賢

むらかみまさる ●1986年麻布大学大学院獣医学研究科獣医学専攻修士課程修了。日立化成工業株式会社、アメリカ・カリフォルニア大学アーバイン校医学部免疫学研究室等を経て、1994年麻布大学獣医学部助手。2005年同大学同僚部教授。博士(理学・東京立大学大学院)。

初年次からの研究の部活動が教育の目玉に

本学は獣医のほか、動物、健康、食物、環境分野のスペシャリストを養成する大学です。特に、獣医学部動物応用科学科の学生は動物に関わる研究をたくて入学してきます。しかし、1・2年次は基礎科目の座学が中心で、動物に触れる機会は年に数回。専門課程に上がる頃には研究への興味を失ってしまう学生が少なくなく、中には中退して他大学に移る例もありました。こうした状況を危惧した教員が話し合い、低学年から本気で研究に取り組める機会として2019年に立ち上げたのが、「動物共生科学ジェネラリスト育成プログラム」(以下ジェネプロ)です。ジェネプロはいわば研究の部活動を。教員が研究プロジェクトを提案し、興味を持った学生が1

年次後期から2年次の終わりまで参加します。部活なので教員にとっては授業数にカウントされず、予算も低額。しかし、想定より多くの教員が手を挙げました。「意欲的な学生と共に研究し、喜びを分かち合いたい」と考える教員が少なくなかったのでしょう。開始から1年経った2020年、文部科学省の「出る杭」プログラム公募をきっかけに、動物応用科学科だけでなく、全学の取り組みとしてジェネプロを拡大。研究と関連する科目を先取り受講できるしくみを構築すると同時に教学IRの強化も図り、通称を「麻布出る杭」に改めました。初年度に11人だった参加者も年を追うごとに増え、本年度は約40のプロジェクトに100人以上の学生が参加。新入生調査では、約20%の学生が「出る杭」があるから進学した」と答えるなど、本学の教育の目玉になりつつあります。

高校の探究学習、入試、入学後の教育・研究を接続

現在、全教員の約半数が「麻布出る杭」に参画。正課外なので、教員の負担は少なくありません。しかし、学生が早期に研究を体験していれば、学年が上がったとき

に間違いなく力が付いているはず。研究の醍醐味を知る学生が増えれば、研究室の活性化にもつながるでしょう。修士課程に進む学生も増えると期待しています。「麻布出る杭」は、早期履修制度により、学部在籍時から大学院の授業を履修でき、修士課程を1年早く修了することも可能です。このしくみを高校生にも適用し、2023年度に東京、神奈川の4つの高校と協定を結び、高校の探究学習から大学の研究にシームレスにつなげるための「いのちと共生の研究プログラム」を始めています。これは、高校2年生が本学の教員の指導を受けながら研究できるものです。プログラム修了後も研究を続けたい生徒向けの入試も整備しました。加えて、全国の高校生が本学の授業をオンラインで受講し、本学入学後に単位認定するしくみも整えています。

本年度、「麻布出る杭」の中に海外研修プログラムを立ち上げました。予想以上の希望者が出ています。今後は一歩進めて、「出る杭」に参加していない学生にも環境を整え、「大学でやりたいことができない」と感じる学生を増やす、言い換えれば、まだ出ていない杭を「出る杭」にする働きかけも工夫したいと考えています。

*文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業(メニューⅡ：出る杭を引き出す教育プログラム)」

取材・文 / 本間学 撮影 / 岸隆子